

# 核融合アーカイブ室における オーラルヒストリーの収集手法

遠藤満子

## 【要旨】

日本の科学系研究機関において、近年、アーカイブズが設立され、組織や研究者に関する資料の収集・保存が行われるようになってきた。そうした動きの中で、オーラルヒストリーによる記録の収集手法が注目されている。

我が国の核融合研究を推進する核融合科学研究所に設置された核融合アーカイブ室では、核融合関係資料の収集・整理・保存・調査研究を行うと共に、オーラルヒストリーを実施し、記録を収集してきた。

本稿では、核融合アーカイブ室で行われてきたオーラルヒストリーについて、核融合研究の歴史と組織との関わりからその目的を記述し、オーラルヒストリーの収集手法およびアーカイブズ化について考察する。

はじめに我が国の核融合研究の歴史と資料収集に関する流れを明らかにし、オーラルヒストリー実施に到る経緯について示す。次に、共同研究機関という組織の特質に注目しつつ、これまでの当室における実施例からオーラルヒストリーの収集手法、記録の公開、および関連資料の収集保存状況を記す。最後に、収集したオーラルヒストリーをアーカイブズとして活かしていくための課題について考察し、研究機関におけるオーラルヒストリー収集の中でアーキビストとして何ができるのか、果たすべき役割について述べる。

## 【目次】

はじめに—科学分野におけるオーラルヒストリー—

1. 日本の核融合研究のあゆみと資料収集
  - (1) 日本の核融合研究のあゆみ  
(核融合科学研究所設立まで)
  - (2) 核融合研究に関する資料収集
2. 核融合アーカイブ室におけるオーラルヒストリー
  - (1) 共同研究の枠組み
  - (2) オーラルヒストリー実施に至る経緯
  - (3) オーラルヒストリーの目的
  - (4) オーラルヒストリーの実施例
3. オーラルヒストリー収集の流れ
  - (1) 語り手およびインタビュー・テーマの決定
  - (2) 聞き手（インタビュアー）の選定

- (3) 語り手 (インタビュイー) へのインタビューの依頼
  - (4) インタビュー事前準備
  - (5) 質問状の送付・内容の確認
  - (6) インタビューの実施
  - (7) 音声記録の文字起こし
  - (8) 記録校正・編集作業
  - (9) 権利の確認
  - (10) 記録の公開
  - (11) オーラルヒストリー関係資料の収集・保存
4. 考 察
- (1) 本室におけるオーラルヒストリーの状況
  - (2) アーカイブズとしての今後の課題
5. オーラルヒストリーにおけるアーキビストの役割  
おわりに

## はじめにー科学分野におけるオーラルヒストリーー

「オーラルヒストリー」とは、基本的にインタビューを行って作成された記録のことであり、通常のインタビューとの違いは、最初から「記録性」を念頭においたインタビューということである<sup>1)</sup>。「オーラルヒストリー」という用語が使われ、広く認識されるようになったのは、20世紀のアメリカにおいてである。1948年、歴史家のアラン・ネヴィンズ (Allan Nevins) がコロンビア大学にオーラルヒストリー・リサーチオフィスを創設し、米国の政治、宗教、ビジネスのリーダーなどからの聞き取りデータを収集・蓄積したのが、世界で最初の組織的なオーラルヒストリー・プログラムとされる<sup>2)</sup>。

1950年代以降、オーラルヒストリーの収集が盛んになる中で、著名な科学者を対象とした聞き取りも行われるようになった。量子物理学に関する「アーカイブズ・プロジェクト” The Archives for History of Quantum Physics “(1961-1973) <sup>3)</sup> では、量子物理学の発展に寄与した物理学者へのインタビューが、米国内に留まらず幅広く行われ、100以上のテープ記録が残された<sup>4)</sup>。

1970年代にはAmerican Institute of Physics (米国物理学協会) がアーカイブズを開始し<sup>5)</sup>、物理学、天文学、地球物理学および関連分野の歴史に関する論文資料収集と共に、科学者のオー

---

1) 喜多千草「オーラルヒストリー入門」(総合研究大学院大学『共同利用機関の歴史とアーカイブズ 2004』、2004年、207頁)。  
2) 御厨貴『オーラル・ヒストリー 現代史のための口述筆記』(中央公論社、2002年初版、179-180頁)。  
3) The Archives for History of Quantum Physics (<https://amphilsoc.org/guides/ahqp/>)  
4) 量子力学の確立に貢献したニールス・ボーア、恒星内のエネルギーが核融合反応であることを明らかにしたハンス・ベテ、日本人初のノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹などがある。  
5) American Institute of Physics (AIP: 米国物理学協会) The Niels Bohr Library & Archives (<https://www.aip.org/history-programs/niels-bohr-library>)

ラルヒストリー収集を行い、現在までに1000を超える記録が集められている<sup>6)</sup>。書き起こしされた文章や音声記録の一部はウェブ上で閲覧できる<sup>7)</sup>。各地の研究者が行ったオーラルヒストリーの収集機能をもつアーカイブズであることから、ウェブサイトにはオーラルヒストリー収集のためのテクニックやアドバイスの掲載があり、教育プログラムも実施されている。

米国において科学分野のアーカイブズでオーラルヒストリーが開始された一因として、第二次世界大戦後、オーラルヒストリーの発展期と同時期に、科学分野も飛躍的な成長を遂げたことが挙げられるかと思う。一流の科学者達の語りによる記録を残すことの重要性が早くから認識されていたのである。

同じ時期、日本でも科学分野がめざましい発展をみせるが、研究の足跡を記録として残すことについては必ずしも重要視されなかった。ゆえに我が国において、科学分野におけるオーラルヒストリーの実施例は多くない。しかし近年、科学系の研究機関において、アーカイブズとしての資料保存とともにオーラルヒストリーの手法は注目されている<sup>8)</sup>。

日本における核融合研究を推進する核融合科学研究所<sup>9)</sup>に設置された核融合アーカイブ室でも、核融合関係の資料収集・保存・調査研究と共にオーラルヒストリーの収集が行われている。本稿では、その目的と収集手法について、核融合研究の歴史と組織との関わりから記述し、オーラルヒストリーの手法とアーカイブズ化について考察する。

## 1. 日本の核融合研究のあゆみと資料収集

### (1) 日本の核融合研究のあゆみ（核融合科学研究所設立まで）

まず、核融合研究について簡単に触れておきたい。核融合は、宇宙空間で絶え間なく作られている太陽や夜空に輝く星のエネルギーの源である。地上で実現できれば、人類は恒久的なエネルギー源を得ることができるとされる。核融合反応の可能性は、1920年頃に英国の天文学者によって、星の進化を説明する際に、初めて指摘されたといわれている。1930年代の終わり頃には、天体物理学、原子核物理学、加速器物理学、放電物理学が組み合わさって、新しい分野である核融合研究が始まっていった<sup>10)</sup>。

日本では、1956（昭和31）年4月、京都大学基礎物理学研究所において核融合に関する最初の研究会が開催された<sup>11)</sup>。同年6月には、大阪大学で超高温研究会が発足。この時期、欧米から帰国した研究者達から核融合研究についての情報もたらされ、核融合に関する情報は、急

---

6) 上野彰・永田晃也『オーラル・ヒストリー研究の科学技術政策分野への応用に関する検討』（文部科学省 科学技術政策研究所 第2研究グループ、2010年、13頁）。

7) 日本の物理学者としては、ニュートリノの観測に初めて成功した素粒子物理学の小柴昌俊、旧文部省・宇宙科学研究所所長を務めた宇宙物理学の小田稔、プラズマの安定性について説き、日本や世界の核融合研究に大きな貢献を果たした大河千弘のインタビュー記録などがある。

8) 高エネルギー加速器研究機構・KEK史料室、自然科学研究機構・生理学研究所アーカイブ室、公益社団法人応用物理学会、国土交通省・国土交通政策研究所（気象衛星分野）などで実施。後者2件はウェブ上で閲覧できる。

9) 正式名称「大学共同利用機関法人 自然科学研究機構 核融合科学研究所」。

10) 西尾成子『核融合の歴史 委託調査報告書』（日本大学理工学部、1995年、1頁）。

11) 核融合アーカイブ室ホームページより（<http://www.nifs.ac.jp/archives/index.html>）。

速に全国の研究者に浸透していった<sup>12)</sup>。以後、大学や官公庁、民間企業などで、組織の枠組みを超えた取り組みが行われることになっていく。

この時代、日本で核融合研究開発の機運が高まった理由として、当時の国際的な動きが挙げられる。1955年、第1回国連原子力平和利用会議（ジュネーブ会議）が開催され、その席上、議長を務めたH. J.バーバが、「核融合を制御する方法は20年以内に見つかる」と予言。核融合炉の実用化をめざす研究が成功することで、世界のエネルギー問題が解決するという期待から、この発言が広く世間に流布する<sup>13)</sup>。第2回ジュネーブ会議（1958年）では米・英・旧ソ連などの国々でこれまで秘密裏に行われてきた核融合研究が一斉に公開された。研究者同士の交流が行われるようになり、こうした国際的な動きが日本の研究者達の刺激になったと考えられる。研究がまだまだ新しい分野であり、世界の動きから大きく遅れをとっていなかったため、日本が研究に参画しリードできる可能性も十分にあったことから、当時の文部省や科学技術庁で核融合研究に関する部会や委員会が設置され、将来の核融合炉実現に向けての議論が行われた<sup>14)</sup>。

1961（昭和36）年、全国共同利用研究所として名古屋大学にプラズマ研究所が設置され<sup>15)</sup>、超高温プラズマの基礎的研究が、全国の研究者による自主的・民主的運営を基盤にして行われた。1960年代は、核融合研究の研究管理体制、組織、研究計画の議論が多数行われ、将来計画の検討の動きがさかんになった時代である。

1970年代に入ると各大学にセンターが増設<sup>16)</sup>、原子力研究所那珂核融合研究所にJT-60装置（トカマク型）の建設が決定され、様々な方向から核融合研究が行われた<sup>17)</sup>。1970年代は核融合研究の成長期といえるが、その理由として、1970年代に起こった二度の石油危機が挙げられる。この出来事から石油に頼らないエネルギー資源確保の必要性が訴えられるようになった。エネルギー資源のほとんどを外国に依存する日本社会において、海水中から無尽蔵にエネルギーを取り出すことができる核融合開発に対する期待は大きなものがあり、政界や経済界などからの積極的な支援が行われた<sup>18)</sup>。この結果、研究が進展・拡大していくことになる。

1980年代に入り石油危機が一段落すると、大学における核融合研究の路線や体制の見直しが迫られるようになる。研究の規模が大きくなり予算規模が増していくにつれ、各大学単独での研究が難しくなったからである。新たな大学共同利用機関を設立する案がまとめられ<sup>19)</sup>、1989（平成元）年、核融合科学研究所が設立された。

12) 早川幸男、伏見康治、山本賢三、関口忠、大河千弘など、日本や世界の核融合研究をリードした研究者達がいた。

13) 西尾成子『核融合研究発展に関する情報収集及び調査 委託調査報告書』（社団法人プラズマ・核融合学会、1997年、11頁）。

14) 1959年、文部省に学術会議核融合特別委員会、科学技術庁に原子力委員会核融合専門部会が設置されている。

15) 現在の核融合科学研究所の前身母体の1つ。

16) 京都大学（ヘリオトロン）、大阪大学（レーザー）、広島大学（理論研究）、九州大学（超伝導トカマク）、筑波大学（ミラー）、富山大学（トリチウム）、電気通信大学（新型レーザー）等。

17) 木村一枝「核融合研究のアーカイブズ」（『共同利用機関の歴史とアーカイブズ2004』、総合研究大学院大学、2004年、245-246頁）。

18) 井口春和「核融合研究の停滞」（吉岡斉・編集代表、新通史『日本の科学技術』世紀転換期の社会史1995年～2011年、第1巻、原書房、2011年、489頁）。

19) 文部省・学術審議会核融合部会『大学における今後の核融合研究について』（1986年）報告。

新しい研究所は名古屋大学プラズマ研究所の機能に加え、京都大学ヘリオトロン核融合研究センター、広島大学核融合理論研究センターの特性的機能が移管統合されたものであり、それぞれの研究機関が持つ優れた実績を融合させることにより、将来の核融合技術の確立に向け、研究を推進していくこととなった。日本独自のシステムである大型ヘリカル装置による実験が開始され、将来の核融合炉実現をめざし、必要な学術的基礎的研究が現在行われている。だが、第1回目のジュネーブ会議から60年になる2015年現在、研究はいずれの国においてもまだ基礎的段階であり、エネルギーの実用化にはさらに長い年月がかかる見通しだと言われている。

## （２）核融合研究に関する資料収集

次に、核融合研究に関する資料収集について述べる。

核融合研究に関する最初の資料整理が始まったのは1970年代、名古屋大学プラズマ研究所時代である。当時、核融合研究企画情報センター<sup>20)</sup>の長を務めた早川幸男<sup>21)</sup>が2つのインタビューを受けたことがきっかけとされる。1つめは1979年に東京大学教授・中山茂と科学史研究グループが実施したインタビューで<sup>22)</sup>、早川はこれをきっかけに、資料収集・保存の必要性について認識する。2つめは1980年に行われた米国の科学史家リリアン・ホジソン (Lilian Hoddeson) によるインタビューである。ホジソンは、1983年に論文を発表<sup>23)</sup>。早川はこれを読み、同じ手法でプラズマ研究所設立の経緯をまとめたいと考えるに到る。

1983年に早川発案のもと、東北大学教授・長尾重夫を責任者として『我が国における初期の核融合研究に関する調査－資料目録』がまとめられ、1987年に早川と秘書の木村一枝が『核融合研究事始め』を共著として発表した<sup>24)</sup>。しかし、1980年代は大学における核融合研究が路線選択を迫られた時期であり、研究に多額の費用がかかる中での資料目録作成に対し、周囲の科学者達の視線は厳しいものがあり<sup>25)</sup>、オーラルヒストリーの実施までには至らなかった<sup>26)</sup>。

その後、同センターや有志の研究者、科学史専攻の大学院生<sup>27)</sup>などが中心となり、学内に残されていた研究者の資料整理が続けられた。1989年にプラズマ研究所が廃止、核融合科学研究所が設立され、愛知県名古屋市から岐阜県土岐市へ移転すると、資料も新しい研究所へと移

20) 同センターは「核融合研究に必要な学術情報の収集、整理、保管、提供等及び核融合研究推進上の課題について調査分析を行い、研究者の共同研究利用に供するとともに、核融合研究に係る企画に寄与することを目的」として1977年に設置されている。(参考)『プラズマ研究所25年史』(名古屋大学プラズマ研究所、1986年、205頁、センター規定第1条より)。

21) 宇宙物理学者、素粒子物理学者、後の名古屋大学学長(1936-1992)。

22) 『新しい萌芽的な研究活動が発展し、専門分野として確立していくまでのケーススタディ』をテーマとしたインタビューであった。

23) “Establishing KEK in Japan and Fermilab in the US: Internationalism, Nationalism and High Energy Accelerators”。日本の高エネルギー加速器研究機構設立の経緯がオーラルヒストリーの手法によってまとめられている。

24) これは核融合分野におけるアーカイブズ研究の始まりとして現在評価されている。

25) 「後の時代を経験する者にとって参考や指針となること、あるいは核融合研究のようなまだ歴史の浅い学問体系にとって過去の資料の蓄積が欠かせない」と早川は考えていたが、この当時、周囲の研究者は科学研究費補助金を使うことに対し、「大事な研究費は研究そのものに使われるべきで、過去の資料収集に使うとは不謹慎極まりない」と厳しく批難している。

26) 詳しい経緯は、木村前掲書(註17)、246-247頁に記されている。

27) オーストラリアからの留学生・科学史家モーリス・ロウ (Morris F. Low) が整理に携わった。

された。組織の廃止や改編に伴い、所蔵されている資料が失われる例は多い。最先端の研究優先の科学系組織の中では過去の資料に重点が置かれなかった時代であったが、そうした状況下で資料を無事移転させた関係者の努力や熱意には並々ならぬものがあったと推察される。

移転後、1995年から1997年にかけて、日本大学教授・西尾成子により「核融合研究発展に関する資料調査」(日本原子力研究所委託による)が行われた。この調査をきっかけに、核融合学会全体に資料保存の必要性が徐々に認識され始める。

資料調査の必要性が認識され始めたのには、時代背景によるところもあった。1990年代は、「科学技術創造立国論」が文部科学省により打ち出され、科学技術研究に大きな予算が与えられるようになる一方、バブル経済の崩壊後の不安定な状況から、多額の国の予算を投入する科学分野での研究について社会の眼差しが厳しくなってきた時期でもあった。そうした世相の動きを受け、研究者の中に説明責任の意識が芽生え始めると、資料保存に対する意識も変わっていくことになる<sup>28)</sup>。核融合研究は長い年月がかかる研究であることから、年月とともに研究者の世代交代や組織の改編が行われるが、こうしたことから資料収集・保存の必要性が認識されるようになってきていた。

アーカイブズに関する研究が当研究所の共同研究として認められ、資料整理、資料目録のデータベース作成などが行われ始める。総合研究大学院大学・葉山高等研究センターのプロジェクト「共同利用機関の歴史とアーカイブズ」<sup>29)</sup>が2004年度から開始されると、その動きの中で自然科学系研究機関(総合研究大学院大学の基盤機関)におけるアーカイブズの構築が図られ<sup>30)</sup>、2005(平成17)年1月、当研究所に核融合アーカイブ室が設置された。

当室では、研究者からの個人寄贈資料、組織(名古屋大学プラズマ研究所、核融合科学研究所)からの提供資料、関連機関や共同研究者からの提供資料を主なコレクションとし、核融合研究に対する歴史的評価と社会に対する説明責任を果たしていくことを目的として、①我が国の核融合研究に係わる史料の恒常的・総合的な調査、収集、整理、保管、②史料目録の作成とそのデータベース化、③収集された史料及びその目録の適切な基準に基づく公開、④収集された史料に基づく年表の編纂、⑤アーカイブズの手法に関する調査及び研究、⑥国内外の関連研究機関とのアーカイブズに関する共同研究などを行っている<sup>31)</sup>。

このように、国内で核融合研究の歴史を伝えるためのアーカイブズの基盤が整ったのは、研究開始よりはるかに遅れてのことであった。

28) 井口前掲書(註18)、511頁。

29) 代表者は菅原寛孝。高エネルギー加速器研究機構(KEK)初代機構長。プロジェクトのきっかけとして、菅原がフーバー研究所など当時のアメリカの戦略的なアーカイブズを視察し、日本の科学技術の研究機関におけるアーカイブズの必要性を感じたことによる。(参考)菅原寛孝「総研大・葉山高等研究センターのプロジェクト研究」(『共同利用機関の歴史とアーカイブズ2004』、総合研究大学院大学、2004年、15頁)。

30) 菅原は2004年のKEK史料室、続く2005年の核融合アーカイブ室など、自然科学系の研究各機関にアーカイブズを誕生させる働きかけをしている。

31) 2016年現在の当室のメンバーは、室長1名(現役の研究者が兼務)、室員1名(学芸員資格をもつ非常勤の事務支援員)、協力員4名(核融合アーカイブ室設立時からのコア・メンバーである共同研究者)から構成。所内では副所長の下に属する独立部門である。

## 2. 核融合アーカイブ室におけるオーラルヒストリー

### (1) 共同研究の枠組み

続いて、当室におけるオーラルヒストリーについて述べる。

当室の特徴的な点は、共同研究を通し、アーカイブズが構築されてきたことである。これは核融合科学研究所が大学共同利用機関であることによる。現在、当室では資料収集・整理・公開、歴史分析を行うと共に、【図1】<sup>32)</sup>のような共同研究の枠組みで、各機関と連携してアーカイブズの研究を進め、研究の一分野としてオーラルヒストリーを実施している。

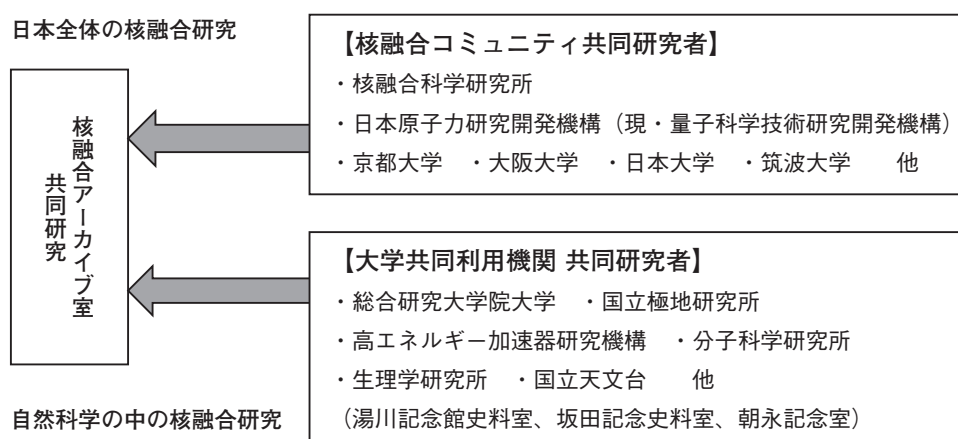


図1 核融合アーカイブ室共同研究の枠組み

オーラルヒストリーの実施が可能になったのも、共同研究による連携が大きい。インタビューには、出張旅費・文字起こし費用・印刷費など諸経費がかかるが、当研究所における共同研究費、当室の運営予算、図書出版費の他、共同研究者の取得した科学研究費助成金、その他、当研究所の日米セミナーの一環として行われることにより可能となった。

### (2) オーラルヒストリー実施に至る経緯

オーラルヒストリーが当室の研究活動として行われるようになった経緯について、次に述べる。

第1節2項で述べたように、核融合研究におけるオーラルヒストリーの実施を考えたのは早川が最初であるが、実際に行われたのは、核融合科学研究所設立後のことである。第1回となるインタビューは、2000（平成12）年に実施された<sup>33)</sup>。「核融合研究発展に関する資料調査」を行った日本大学・西尾成子を研究代表とし、当研究所や関係大学機関の研究者が参加し、東京大学名誉教授・関口忠へのインタビューが行われている。関口は日本における核融合研究の

32) 平成26年度第10回核融合エネルギー連合講演会発表資料『核融合アーカイブ室の目指すもの』（井口春和、木村一枝、難波忠清、松岡啓介、遠藤満子）を参考にした。

33) 当室の設置前であるが、核融合科学研究所の共同研究として行われ、設立時のメンバーがインタビューに参加しているため、第1回として位置づけられている。

黎明期から成長期にかけ、日本の核融合研究を牽引した第一人者である。1965年から1980年代後半にかけての日本の核融合研究の経緯について、2度のインタビューが行われ、この時のインタビューが、後に続くオーラルヒストリーの手法や資料収集のベースとなっていく。

2004年度から総合研究大学院大学葉山高等研究センターのプロジェクト「共同利用機関の歴史とアーカイブズ」が開始されると、これに当研究所の関係者も参加。研究領域のひとつとしてオーラルヒストリーの手法による資料収集が位置づけられ、この動きと連携する形でオーラルヒストリーが行われるようになり、以後、当室において共同研究として継続して実施されていくことになる。

### (3) オーラルヒストリーの目的

次に、当室におけるオーラルヒストリーの目的を述べる。

当室では「核融合研究の歴史に関する資料の収集手段」としてオーラルヒストリーを位置づけている。先述したように、核融合研究の黎明期においては、研究機関の中での資料収集・保存の必要性が認識されておらず、所内組織として資料の収集が系統だっで行われてこなかった実態がある。個人寄贈資料が多いゆえに資料に欠落があり、研究開始時期に計画の方向性を決定する重要な会議が行われているが、議事録や会議メモなどが揃っていないわけではない。資料間の関連が不確かなために、歴史的な流れが明確に分からない場合がある。

また、記録として残される公文書の常として、決裁されたことのみが記され、意志決定の過程は示されないことが多い。例えば、ある会議から次の会議の間に流れが変わっていたとする。前に決まっていたことに対し、次の会議では正反対の流れになっているとしても、その経緯について残された資料から読み取ることは不可能に近い。

こうした黎明期の核融合研究推進の意志決定の過程をたどるために、資料の補完が必要となる。そのための一手段として、当時の事情を知る関係者に聞き取りを行うのである。重要な会議に出席した、あるいは大掛かりなプロジェクトや開発に参加した当事者であるからこそ知っている事実があり、現場に携わった者でなければ知りえない事柄がある。当時の現場の様子を知る関係者の記憶を記録として残すことが、オーラルヒストリーを行う目的である。

このように、当室では資料の補完、あるいは歴史の流れを明確にするために、研究者の記憶の記録化を目的として、核融合研究開発を牽引した人物を対象にオーラルヒストリーの手法に基づいたインタビューを行っている<sup>34)</sup>。オーラルヒストリーの手法を用いることにより、意思決定の過程や当時の研究の流れに関する「記憶」が「記録」として残されることになり、一次資料では分からない事柄や過程を読み解くための資料補完へとつながっていくことになる<sup>35)</sup>。

34) 当室設立時のメンバーである大林治夫が2003年の日本物理学会第58回年次大会(30pZM-5)の中で、「既存の資料は系統的ではない。できるだけ補完的な資料を集める必要があるため、広く大学関係の協力を得なければならない。共同研究の活動としてインタビュー形式での資料化を試みる」と述べている。

35) 上野・永田前掲書(註6)3頁の中で、オーラルヒストリーの特徴を「公式文書記録を相互補完的に補うもの」として述べており「公式文書に変わる記録、あるいはこれを代替する情報ではない」としているが、当室も基本的にそのスタンスで行っている。



#### （４）オーラルヒストリーの実施例

次に、当室のオーラルヒストリー実施例を【表１】に記す。

表１ 核融合アーカイブ室のオーラルヒストリー実施リスト

No.	インタビュー対象者	テーマ（記録名）	例題	実施日／時間・参加人数	記録冊子
1	関口忠 (東京大学名誉教授)	日本の核融合研究開発の経緯 1965～1986	(1)	2000年8月3日／ 3時間30分、11名	NIFS-MEMO-33 (Dec. 2001) ID：100-01-01
2	関口忠 (東京大学名誉教授)	1980年代後半以降の日本の核 融合研究開発の経緯	(1)	2002年4月13日／ 3時間30分、14名 (聴講多数)	NIFS-MEMO-40 (May2003) ID：100-02-01
3	松浦清剛 (名古屋大学名誉教授／R計画デ ザイン・チームリーダー)	核反応研究計画「R計画」の 経緯 —松浦清剛先生との懇 談の記録を中心に—	(2)	2004年1月19日／ 3時間、7名	NIFS-MEMO-47 (Jan. 2006) ID：100-03-01
4	森野信幸 (元日立製作所、日本原子力産業 会議、プラズマ・核融合学会理事)	我が国の核融合研究開発にお ける産業界の役割に関するイ ンタビュー	(3)	2004年11月18日／ 3時間30分、5名	ID：100-04-01
5	山本賢三(名古屋大学名誉教授、 日本原子力研究所理事)	我が国における核融合研究開 発の経緯	(3)	2005年7月7日／ 3時間、9名	ID：100-05-01
6	Dr. K. M. Young (プリンストン大学プラズマ物理 研究所／計測関係リーダー)	Archiving of the early days' nuclear fusion research in US and Japan	(3)	2005年12月15日／ 3時間、9名	ID：100-06-01 校正途中
7	吉川庄一 (プリンストン大学プラズマ物理 研究所／主任研究員、教授)	Archiving of the early days' nuclear fusion research in US and Japan	(3)	2005年12月15日／ 3時間、9名	ID：100-07-01
8	林忠四郎 (京都大学名誉教授)	京都大学における黎明期の核 融合研究	(4)	2008年10月28日／ 3時間、2名	ID：100-09-01
9	森茂 (日本原子力研究所・元副理事長)	森茂氏インタビュー記録 ・原研でのJT-60開発 ・INTOR国際協力 他	(3)	2011年3月10日／ 3時間、5名	ID：100-10-01
10	市川芳彦 (核融合科学研究所 名誉教授)	市川芳彦氏インタビュー記録 ・日ソ協力、プラズマ研移転 他	(4)	2012年9月28日／ 4時間(2回)、5名	ID：100-12-01
11	吉川允二 (日本原子力研究所 元理事長)	吉川允二氏インタビュー記録 ・General Atomics時代 ・原研・大型トカマク研究 他	(3)	2013年10月31日／ 3時間、5名	ID：100-13-01

2016年8月22日現在の核融合アーカイブ室ウェブサイト掲載内容より。IDは当室所蔵資料番号。

インタビューは、国内の核融合研究に関わる大学や研究機関、民間企業の他、海外の研究機関・企業等の研究者などを対象に行われており、内容として日本における核融合研究開発の経緯や国際協力関係、核融合研究推進をめぐる論争の他、インタビュー対象者の科学者としての歩みにもスポットを当てている。他にリストには掲載されていないが、核融合アーカイブ室のスタッフが、他の機関の共同研究者に協力してインタビューを行ったケースもある<sup>36)</sup>。

36) 日本や世界の核融合研究との関わりなどについて大河千弘(米国ジェネラル・アトミック社副会長)へのインタビューや、寺嶋由之介(名古屋大学名誉教授)への「核融合研究開発の歴史に関する証言」のインタビューなどである。いずれも植松英穂(日本大学物理学部教授)が取得した科学研究費助成金によって実施され、最終的な編集が日本大学で行われている。当室のスタッフもイ

当室の創設時には、次の【表2】の内容を例題としオーラルヒストリーが行われている。

表2 オーラルヒストリーの例題<sup>37)</sup>

例題1	核融合研究開発に関する各種委員会等における討議と計画実現に至る経緯を明らかにする
例題2	名古屋大学プラズマ研究所において研究が開始されたものの、実現には至らなかった「核反応プラズマ研究計画」(通称：R計画)の経緯を明らかにする
例題3	関連する複数の方々とのインタビューを試み、大学・研究機関と企業との関わりについての史実を明らかにする

例題1の設定理由として、核融合研究開発は、学術会議をはじめ、様々な委員会で議論が行われているので、核融合研究の歴史を記す上で、それらを整理しておく必要があることによる。例題2の設定理由は、先駆的な研究とされた大きなプロジェクトが実現には至らず、現在でも議論を呼んでおり、立案から計画終結に至るまでの実際の経緯を明確にするために、当時、計画に関わった関係者による聞き取りを行う必要性があったことによる。例題3の設定理由は、核融合研究開発初期における企業と研究機関との関わりについて調査し、その特質を明らかにするとともに、諸外国との相違の有無を比較することによる。

この3つの例題が2005年当時のオーラルヒストリーの主な例題であり、核融合のアーカイブズとしての充実を図る上で必要とされた内容である。この他、近年行われたインタビュー記録を読んでも、例題3には、「大学・研究機関と企業との関わり」の他に、各研究機関の様子等が語られることも含まれているように思われる。同じ機関に所属していた人物それぞれへのインタビューもあり、内容が関連していることが多い。

3つの例題に加え、近年ではあらたに「核融合研究者の足跡を辿ると共に、核融合研究の歴史上での主な出来事や事件(論争)などの真相や経緯を明らかにする」という内容が加わっているように見受けられる。私見ながらこれを例題4と仮定し、【表1】に記した。

### 3. オーラルヒストリー収集の流れ

続いて、核融合アーカイブ室におけるオーラルヒストリー収集の流れについて記述する。【図2】を参考にされたい。

#### (1) 語り手およびインタビュー・テーマの決定

主なインタビュー対象は、核融合研究の黎明期から成長期にかけての研究の流れに中心的に係わった研究者であり、1人に絞って行われる。インタビュー対象を決定する場合、研究分野のいくつかの会議において、各議事録に共通して名前が出てくる人物にも注目する。核融合研

---

ンタビューに参加、助言を行っているので、その経緯から当室のオーラルヒストリーの資料として登録されているものもあるが、核融合アーカイブ室ウェブサイトにて現時点では記載されていないため、リストには加えていない。

37) 例題は、藤田順治「核融合科学のオーラルヒストリー」(『共同利用機関の歴史とアーカイブ2005』、総合研究大学院大学、2005年、55頁)による。2016年現在では必ずしもこの例題に従ってインタビューが行われているわけではない。

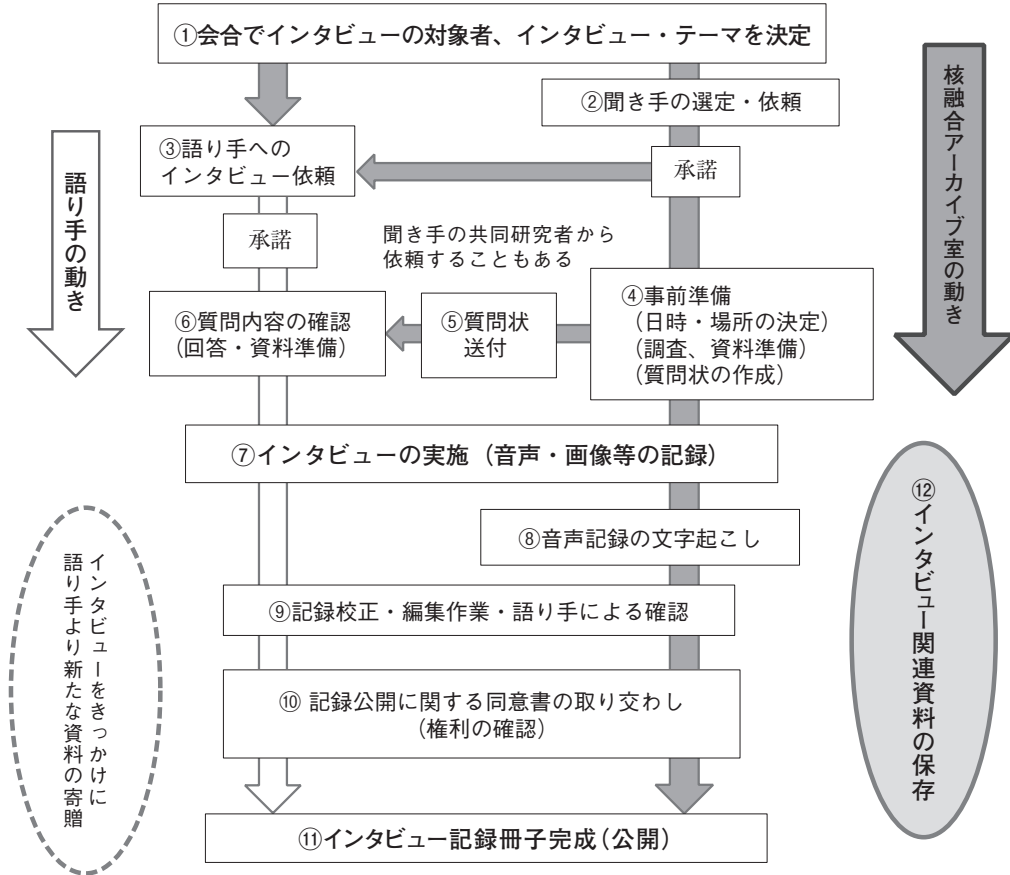


図2 核融合アーカイブ室オーラルヒストリー収集の流れ

究は、文部省・科学技術庁（現・文部科学省）、名古屋大学プラズマ研究所などで様々な会議が催され、議論されていた。多くの会議があっても、各開催機関ともに出席している研究者は多くはない。逆に、どの機関の会議にも出席している研究者は、その分野で重要な影響力を持つ人物ということになり、インタビューの目的に合う語り手ということになる。

## （2）聞き手（インタビュアー）の選定

インタビューは当室のコア・メンバー（共同研究者）が中心になって実施されるが、場合によって、語り手と関わりのある人物や、関連機関の共同研究者にもインタビュアーを依頼する。

例えば【表1】のリストNo.11にある吉川允二インタビューでは、日本原子力研究所<sup>38)</sup>の関係者にインタビューに参加してもらっている。関連機関の研究者に加わってもらうことにより、実情について正確な情報を提供してもらえると共に、語り手へのコンタクトも取りやすくなる。

インタビュアーは核融合関係の科学者が中心であるが、科学史研究者、オーラルヒストリー研究者も含まれる。語り手が1人に対し、聞き手が複数人になるのが、当室のオーラルヒスト

38) のちの日本原子力研究開発機構。2016年4月より量子科学技術研究開発機構となる。

リーの特徴の1つであるが、これは共同研究で行う特性とも言える<sup>39)</sup>。

聞き手が同じ核融合関係の研究者である利点として、研究そのものの流れや時代背景など、専門的に理解しているため、語り手との間に共通の認識をもってインタビューが進められることがある。的確な質問や話題が出されることから、記録資料として意味のあるものになる。

しかし、関係者に近い人物が複数人揃うと、座談会的な雰囲気になることがある。語り手以外の人物が長く語ったり、話し手が頻繁に入れ替わったりといったケースや、あるいは語り手が周囲の人物に対して質問の回答を要求するといったケースもある。こうなると、個人を対象としたオーラルヒストリーの記録としての意味合いが薄れてくる<sup>40)</sup>。

多くの研究者は、オーラルヒストリーやアーカイブズの専門家ではないので、聞き手として参加してもらう際には、実施目的とオーラルヒストリーとして記録を残すことの意味について、事前に十分理解してもらわなければならない。人数が多くなる場合は、司会を立て、それぞれが何を聞くのか役割を決めて行う必要がある。

### (3) 語り手 (インタビュイー) へのインタビュー依頼

通常、インタビューの最初の関門として、相手がインタビューを受けてくれるかどうかということがある。当室の場合、共同研究関係者のつながりで依頼するケースが多いので、事前にある程度、信頼関係が構築されているため、依頼に対する困難は比較的少ない。

核融合分野の研究者からではなく、オーラルヒストリー研究者から依頼した例もある。同じ分野の研究者でないという一種の距離感が、逆に依頼の際に相手に安心感を与え、その理由からインタビューを承諾された例もある。

身近な人物に対しての依頼はしやすくはあるが、資料の補完という目的において必ずしも良いとは限らない。第3節1項とも関係するが、記録として残すために、何を聞きたいのかテーマを明確にした上で語り手を選び、依頼する必要がある。

### (4) インタビュー事前準備

#### ① 関連資料の準備

インタビュー前に語り手の略歴やテーマに関連する委員会の議事録などの資料調査を行う。事前調査は、当室のオーラルヒストリーの目標である資料補完のために必要なものである。

資料調査の中で、欠けている内容、あるいは資料からは読み取れない経緯があれば、語り手から話を聞くことにより資料補完につなげていく。

核融合関係の流れや関係の各種会議などを記した年表も準備される。これにより、語り手・聞き手ともに正確な年代を把握することができ、記憶をたどりやすくなる。こうした関連資料

39) 関口忠の2回目のインタビューでは、聞き手が特に多くなっている。これは大学生も聴講したことによる。オーラルヒストリーとしては特異なケースかと思われるが、研究をリードした先達の研究者の語りは、後進の研究者にとって関心が高いものであり、この例からも、研究者のオーラルヒストリーを残すことは意味のあるものだと考える。

40) 前掲書(註2)138頁で、御厨も同じ点を指摘し、オーラルヒストリーの基本として「まずは黙って聞くということである。聞き手が語りすぎるのはいけない」としている。物性物理学史の聞ききを行った勝木渥も「聞ききに関する覚書」(『科学史研究Ⅱ』、日本科学史学会、1985年、180頁)の中で同様の指摘をしている。

は、資料補完として行う場合に特に必要なものである。資料として残すオーラルヒストリーにするためには、この事前準備こそ時間をかけて丁寧に行われなければならない<sup>41)</sup>。準備がなされていないとインタビューが語り手の独演会的になり、本来のテーマから逸れ、目的が十分達成されないことがある。

調査の際、保存資料の状態確認も行うことができるので、点検の良い機会にもなる。

## ② 質問状の作成

インタビュアーになったそれぞれがテーマに沿って質問したい内容を出し合い、メール、あるいは直接相談の場を設けながら練り上げていく。出された質問は、主にインタビュー対象者の大学卒業後からの経歴に沿って内容がまとめられる。共同研究者が研究上知りたい内容を出し合うため、質問数は自然と多くなる<sup>42)</sup>。核融合研究に関するテーマ・ヒストリーが中心であるが、中には語り手の幼少期から学生時代、研究者になるまでの体験、読んだ本、他者との関わりや影響を受けた人物といった人生経験や人間的関心などの視点なども質問に取り入れているケースがある<sup>43)</sup>。質問内容に定型はなく、語り手によってそれぞれ違うものになる<sup>44)</sup>。

## ③ 過去のインタビューの情報把握

インタビュー対象者がいずれも何らかのリーダー的立場にあった人物であるため、過去のインタビューに関する調査も欠かせない。同じような内容のインタビューがあれば、わざわざ費用や手間をかけて実施する意味がないからである<sup>45)</sup>。しかし、過去のインタビューで明らかにされなかった内容について、時間的経過によって語り手が話してくれる可能性もあり、その点にポイントをおいてインタビューを行うことも考えられる。インタビューを行うタイミングも重要な要素の1つである<sup>46)</sup>。こうしたことから過去に行われたインタビューについての情報取

41) 事前調査の必要性について、前掲書（註1）211頁の中で喜多は、「良いオーラルヒストリーの記録にするためには、文書の記録ではどこまで分かっている、どこが分からないか事前に確認する必要がある。その上で聞きたい情報をきちんと聞き出さないと歴史の資料としては価値がない」としている。

42) 近年行われたインタビューでは、8領域・60項目以上の質問が出されていた。

43) 上野・永田前掲書（註6）13頁によると、例えば科学技術政策研究に応用するケースでは、語り手の個人史に焦点を当てるライフ・ヒストリーについては、研究の性格上、政策に直接関係するようなインプリケーションを得る事が難しいと考えられる。一方、近年の米国の科学技術分野におけるオーラルヒストリー研究では、米国社会の文化や制度、政治から与えられる影響、個人の周辺環境から如何なる影響を受けて科学研究の道を選ぶに至ったか、という視点から研究が進められている。

44) テーマ・ヒストリー中心か、ライフ・ヒストリーの要素を入れるかは、人によって見解が分かれることである。歴史資料としての内容を重視する科学史研究者は前者である場合が多く、オーラルヒストリー研究の立場では、語り手の人物像を浮き彫りにするために後者の要素は必要であると考えられている。当室では対象とテーマによって質問内容を決めている。

45) 【表1】No 8の林忠四郎インタビューがその例。林は宇宙物理学と核融合研究の両分野に関わりがあった人物。核融合研究が50年目を迎える時に国内の天文学も100年目の記念の年で、事前に天文学グループによるインタビューが刊行されたため、インタビュアーは質問を変更し内容が重ならないようにした。〈参考〉「林忠四郎氏インタビュー記録」（核融合アーカイブ室、2008年）、佐藤文隆・編「林忠四郎の全仕事—宇宙の物理学」（京都大学学術出版会、2014年）。

46) 上野・永田前掲書（註6）、7頁では、「語り手が現場を退いて様々な柵や利害関係から解放され

集も必要である。

### (5) 質問状の送付・内容の確認

質問状は事前配布される。語り手はそれにより内容を把握し、インタビューに臨むことができる。質問内容が共に把握でき、関連資料が揃っていれば、テーマにせまるオーラルヒストリーとなる。語り手によっては質問状への回答の他に、自身で関連資料を用意することもあり、それも核融合の歴史研究上、大切な資料となる。

### (6) インタビューの実施

インタビューは、基本1回であり、休憩を途中にはさみ、およそ3時間から4時間かけて行われる。必要のある場合は2回に分けて行うこともある。ICレコーダーで音声を録音し、デジタルカメラ撮影で画像を残しているが、それらは聞き手が準備して行う。その場の様子をメモする記録者的な役割は置かれていない。

オーラルヒストリーの中には長期計画で数を重ねてインタビューを行い、人物像や特徴を把握した上で次回からのインタビューを実施し、核心に迫る方式もあるが、いずれの場合でも、語り手・聞き手の時間調整が課題になる。特に共同研究者数人によるインタビューでは、予定調整・出張費用捻出の面、あるいは高齢になっている語り手への健康面への配慮から回数を重ねることは難しく、ゆえに限られた時間の中で行う。インタビュー会場は、事前相談の中で決定される。おおむね当室で行うことが多いが、語り手の健康面にも配慮して場所を選定する。

国内だけでなく、海外の研究機関で実施されたケースもある。【表1】No.6のK. M. Young、No.7の吉川庄一がその例であり、米国の研究機関で実施されている。K. M. Youngへのインタビューは英語で行われているが、日本人である吉川のインタビューも全て英語での記録である。

これは米国の研究機関という環境への配慮からである。外国の研究機関では、日本人同士が日本語で会話をしていると、秘密裏に情報のやりとりをしているのではないかと疑われる可能性があるため、英語でのインタビューになったことを参加者から伺った。オーラルヒストリーを通して、外国の研究機関の日本とは違う環境を垣間見ることができる例である。

### (7) 音声記録の文字起こし

次に、録音された音源からの文字起こし作業になる。オーラルヒストリー開始当初は、学生が録音テープを聴きながら文字起こしをしたり、音声変換ソフト<sup>47)</sup>が使われたりしたが、現在は全て業者に依頼している<sup>48)</sup>。依頼時には、文字起こしの手がかりとなる資料として、①音声ファイルの種類(録音形式)、②録音時間、③参加人数、④参加者名(インタビューの中で

---

る時期、しかし記憶が薄れるほどは時間が経過していない時期に開始するのが望ましい」とされている。

47) 音声変換ソフト(ドラゴン・スピーチ)は、付属のマイクに向かって話した内容がそのままwordのデータとして変換されるというものである。1人の音声しか認識しないため、インタビューそのものの変換は不可能である。過去には当室の室員がテープを聞きながらそのまま内容を話し、変換させるという方法をとっていたが、聞き取りの負担はソフトを使わない時と比べて変わらないため、現在は行っていない。

48) 文字起こしにかかる費用は、当室の年間予算計画立案の際に組み込んでいる。

呼ばれている名前)、④語り手、聞き手の最初の言葉（以後の会話で人物の判別の際、手がかりになる)、⑤その他、注記（聞き取りが難しい箇所の記述について）などを記し、音声ファイル（CD-R）と一緒に送る。およそ1か月の内に文字起こしされた最初の原稿がwordデータで納品される。その後、校正作業に入る。

## （8）記録校正・編集作業

### ① 校正・内容の確認作業

文字起こしされた原稿は、インタビュー参加者にメール添付の形で配布され、順番を決めて校正作業を行っていく。文字起こしの最初では、再度、音声記録を聞きながらの確認となる。会話の中で出てくる個人名の表記の確認や語句の訂正から行い、専門的な用語の記述を確認したり、業者では聞き取れない言葉の穴埋めをしたりする。

最初の作業の中では「あー」「えー」など、内容と関わりのない言葉を削除する。そうした言葉をありのままの記録として残すオーラルヒストリーもあり、心境の読み取りなどに使われるが、テーマを設定した「記録資料」として残す際には必要がないと当室では考えている。読み手の視点を考え、しかし元の記録内容をできるだけ忠実に残すことを重視しながら、資料として読みやすい形に校正を行う。

校正はインタビュー参加者一人ずつ異なった色分けをし、誰が行ったかわかる形にしている。必要がないと思われる部分もいきなり削除せずに、線で消す形をとっている。ある者が必要ないと思っても、別の視点から見れば必要だと判断される可能性もあるからである。

校正では、年代や内容の確認作業が行われる。単なる勘違いによる年代の間違いについては、語り手に特に断りなく訂正を行っていくが、話の内容が関連して訂正が難しい場合については、語り手に確認をしながら注釈の形で見解を付す。年代や関連する内容の間違いは、事前準備が十分でない場合に起こりやすく、校正作業を困難にする。インタビュー時に資料が揃っていれば、その場で事実確認ができ、訂正も比較的容易である。校正作業がある程度進んでくると、語り手にも原稿を確認してもらいながら作業に加わってもらう。

この校正作業が最も時間と注意を要するところである。話として聞く分には興味深い内容であっても、記録として残すのにはどうかという場合がある。例えば人事に関わる内容である。その時の話の流れで思いがけず出ることもあり、校正作業の中で残すかどうか見解が分かれる。

しかし、語り手自身から「正式に記録として残す内容と話題にとどめておく内容とは、今後を考えると区別する必要がある」という主旨の助言が過去にあり、以後、公式に出す記録からは削除する方針がとられている。一種、身内ともいえる、特定分野のつながりのある関係者によるインタビューであることを考えれば、適切な処置だと思われる。インタビューに参加していない第三者の名誉や利害に関係すると思われる言葉には、特に注意を要する<sup>49)</sup>。

インタビュー当時、聞き手から「オフレコで」と言われた内容でも、校正段階で「記録に残して良い」と言われる場合もある。こういう内容は、公文書には残っていないものなので、あ

49) 上野・永田前掲書（註6）75頁、資料「オーラルヒストリー研究とは何か①松島茂・東京理科大学教授による講演」の質疑応答の中で、松島は「第三者のことを言う時にはきちんと裏をとる。他人の評価に関するゴシップ的なことを聞いても意味がない。トラブルが起こる可能性があることは削除する。それは聞く時のこちら側の安全装置である」としている。

る意味、貴重な資料となり、オーラルヒストリーを行う意味が出てくる。

## ② 記録冊子の編集

校正作業が終わると、写真や関係資料（データ）、年表などをつけ、記録冊子として発行する準備がなされる。記録冊子の内容構成は、概ね次のとおりである。

- ・表紙（インタビュー記録名、発行日、発行者、ID番号付与）
- ・まえがき（インタビュー実施において、中心的役割を果たした人物による趣旨説明）
- ・インタビュー実施要領（実施日時、実施場所、出席者の氏名・所属）
- ・語り手の略歴（生年、大学卒業年、経歴・主な役職など）
- ・年表（インタビュー内容に関係のある出来事、略歴とリンクさせることもある）
- ・目次
- ・本文（インタビュー内容）
- ・質問状（主に経歴に沿った内容ごとにまとめられる）
- ・写真（語り手、インタビュー風景、内容の関連写真など）
- ・あとがき（謝意）
- ・付録（関連資料、参考文献など）

インタビュー実施要領に、実施日や場所、参加者（語り手・聞き手）の氏名・所属を記し、本文においても誰の発言が分かるようにしている。発言者を明確にすることで、記録の要件である真正性（Authenticity）と信頼性（Reliability）が確保されることになる。

語り手の発言には、ある特定の聞き手がいたからこそ語られたという内容もあるので、それぞれの氏名・所属を示すことで、語り手の発言との関係性が読み手にも分かるようにしている。

## （9）権利の確認

### ① 写真掲載の許可

最近の記録冊子では、インタビュー時の写真を掲載している。写真掲載にあたり、口頭の約束であるが、参加者それぞれの許可を得ている。インタビューに直接参加していない人物の写真も内容との関係から掲載することがあるが、その際にも確認を取るようになっている。

### ② 同意書の取り交わし

本来、インタビューの前に行うものであるが、核融合アーカイブ室ではインタビュー実施後に行われることが多い。交わすタイミングについては、その時々で違っている。同意書の形式が整ったのは比較的最近のことである。オーラルヒストリー開始当初から、こうした同意書を交わすことの必要性は認識されていたが、その行為が語り手にとって、一種の緊張を生む行為であり、行うことによって必要なことを話してくれなくなるのではないかという懸念から、口頭で伝えるのみで同意書の導入が見送られてきた経緯がある。

しかし、完成した記録冊子が資料として活用されるためには、公開の必要があるため、要件を記した同意書の形式を整えることになった。同意書には、次の内容が記されている。



- ・語り手氏名
- ・インタビュー日時、場所
- ・聞き手氏名
- ・取り決め事項（資料の保管、閲覧希望者への公開、引用の許可、語り手自身の利用、公開制限と参加者の守秘義務）
- ・付帯条件（公開を制限する場合は、頁・行・期間について記す）
- ・語り手の署名（日付、氏名、住所）
- ・聞き手の署名（代表者として当室の室長名、連絡先）

## (10) 記録の公開

こうした要件を整えた後、記録冊子が刊行される。冊子の刊行までに、およそ1年から2年がかかり、語り手の承諾を得た後に公開となる。

記録冊子は、語り手、聞き手、当研究所の研究者（所長、副所長、研究系の主幹等）、図書館関係者、共同研究代表者などに渡された後、希望者に配布を行っている。当研究所のウェブサイト内にある当室のページでもその旨が記されており、冊子として完成された記録については公開を原則としているが、現時点では、核融合、あるいは自然科学系アーカイブズの共同研究者や科学史研究者など、研究目的が明確な、身近な研究者を中心にした公開に限られている。

当室のオーラルヒストリーのオンライン公開については、ホームページからリンクする形でPDF資料として全文閲覧が可能なものもあるが、過去、当研究所の刊行物（NIFS-MEMO）として公式に出されたものに限られる。NIFS-MEMOは国内のみならず、世界に向けての公開を前提としているため、オンライン掲載が可能になっている<sup>50)</sup>。当室で独自に刊行したオーラルヒストリーの記録冊子については、オンラインでの公開はなされていない。

オーラルヒストリーは人が語る言葉であるだけに、第三者によって部分的に使用されたり、違う解釈で伝えられたりした場合、本来の言葉から歪曲されたものが「事実」として伝わっていく危険性もある。オンラインでの公開は、特にその危険性を孕むためである<sup>51)</sup>。また、過去のインタビューの中で、NIFS-MEMOとして刊行された後に、見解の違いなどから意見があったことにもよる。オンラインでの公開後に問題が出た場合、対応が難しくなることから、以後、オンラインによる記録公開には慎重な姿勢が取られている。この件は第4節2項の中で述べる。

見解の違いは起こりうることであり、当アーカイブ室としてもこの件から、特にプロジェクトとして多人数が関わったものについては、1つの視点からでなく違う視点で多角的に見ていくインタビューの必要性を認識し、対応をとる方針にしている<sup>52)</sup>。

---

50) 契約書の取り交わしが無かった当時の語り手も、研究所の刊行物としてオンラインでの記録公開がされることを承知していた。

51) 梅崎修・田口和雄「コロンビア大学・CCOH（Columbia Center of Oral History）におけるオーラルヒストリー調査とアーカイブについて」（『法政大学キャリアデザイン学部紀要』、2013年、ISSN：1340-3043。http://hdl.handle.net/10114/8015、325頁）でも、オーラルヒストリーを第三者によって勝手に使われる危険性について指摘されている。

52) 上野・永田前掲書（註6）18頁の中で「オーラルヒストリーは主観によって形成される特徴を持つので、従って利害相反を生じる可能性がある事象については、異なる立場からの様々な見解を

## (11) オーラルヒストリー関連資料の収集・保存

オーラルヒストリー実施の過程で、次の資料が収集されている。

- ①インタビュー記録冊子
- ②インタビュー実施関連資料
  - ・音声記録 (カセットテープ、ビデオテープ、MD、CD-R、DVD-R、など)
  - ・文字起こし原稿 (紙資料、wordデータ)
  - ・校正原稿
  - ・写真
  - ・メール、書簡など連絡文書
  - ・同意書
  - ・語り手に関する資料 (著作、過去のインタビュー、自叙伝など)

記録冊子完成・公開までに生み出される資料も残していくことが望ましい。現在、公開対象にはなっていないが、書簡でのやりとりの中には、語り手の研究や考え方に関する内容も見受けられるためである。これらを整理してまとめ、オーラルヒストリー・コレクションとしてFileMaker Proの電子目録に登録、資料を保存容器に収納し、インタビューに関する一連の作業は完了となる。研究者の個人寄贈によってコレクションが形成されてきた当室としては、直接のインタビューで知り得た個人の足跡や研究の歴史に関わる内容も、先に述べた資料補完の目的の遂行とともに、研究に関する新たなる資料となる。

インタビューをきっかけに語り手から関連資料や新たなる資料の寄贈を受けることもある。特筆すべきは、トヨタ財団の助成で行われた旧ソビエト連邦の核融合関連の研究施設の調査資料であろう<sup>53)</sup>。当時、共産主義の体制下にあった旧ソ連の調査資料はきわめて珍しく貴重なものである。インタビュー記録の中には旧ソ連訪問時の様子を記した記録もある。調査に同行した研究者も当室の協力員 (共同研究者) であることから、当時の話を伺いながら内容の詳細を調査し、目録作成をできるだけ早い時期に行いたいと考えている<sup>54)</sup>。

最近では海外で活躍した日本人研究者からの資料寄贈の話も出ており、オーラルヒストリーの実施が新たなる資料収集のきっかけともなっている。

## 4. 考 察

### (1) 本室におけるオーラルヒストリーの状況

オーラルヒストリーのアーカイブズ化の流れを大まかに辿ると、①インタビューの実施、②収集した音声記録の編集、③記録としての保存、④保存された記録の公開・利用になる。

通常、インタビューが行われた後、アーカイブズ化に至るまでには資金・人材・保存場所の

---

記録する必要がある」との指摘がある。

53) 市川芳彦寄贈資料。市川はソ連崩壊後のロシアの科学研究者への援助を訴えた人物でもある。

54) 中にはロシア語の資料もあるので、当時の様子を知るロシア語に詳しい研究者の協力は不可欠である。

確保等から困難が伴う。その結果、オーラルヒストリーを収集した研究者自身にのみ調査結果が使われるという短いスパンでの利用になり、以後、資料としては活用されない状況になることが多い。これは先行研究により既に指摘されているとおりである<sup>55)</sup>。

当室で実施されたオーラルヒストリーについては、研究機関に属するアーカイブズであることや共同研究として長年継続して行われてきたことなどにより、オーラルヒストリーの手法や、記録資料の作成、保存場所の確保、公開への一通りの流れができており、研究者のボランティア的な作業に頼りつつも、一般的にアーカイブズ化に伴う困難といわれる関門をおおよそクリアしていると言って良いかと思う。

アーカイブズ活動の一環としてのオーラルヒストリーは、収集した記録が公開・利用されることが最終目標となるため<sup>56)</sup>、そのための環境や条件の整備が必要となる。

今後、当室が核融合研究のアーカイブズとしての役割を果たしていくためには、オーラルヒストリーをとおして収集された資料の利用について考えていかなければならない。

その方法や課題について考察し、次に述べる。

## （2）アーカイブズとしての今後の課題

### ① オーラルヒストリー実施に関する情報の提供

「核融合アーカイブ室がオーラルヒストリーを行っている」という事実について、アーカイブズの存在とともに、まだ周知されていない現状がある。オーラルヒストリーを収集していることを知ってもらい、かつ第三者に利用してもらうためには、その事実を何らかの手段を用いて伝えることを考えなければならない。

その手段として最初に考えられるのが、ウェブサイトを使っての伝達である。

当室では、研究所サイト内のアーカイブ室用ページに、オーラルヒストリーの実施記録を掲載し、語り手の許可が出たものについては希望者に配布するということを記しており、他に、物理学会や自然科学系アーカイブズ研究会などで、収集したオーラルヒストリーに関する発表を行い、内容に関心を示した研究者に記録冊子の配布を行っている。

現在、オーラルヒストリーを室独自の刊行物として、研究所職員や共同研究者を中心に身近なところへの配布という形で公開しているが、今後、研究での利用を前提に、情報提供の範囲を広げる方向で検討を始めている。現在の当室の状況として、何点かのインタビュー記録については研究所内の図書館で所蔵図書として登録され、オンライン蔵書目録（OPAC）や学術情報データベース（CiNii Books）により蔵書検索を可能にしている<sup>57)</sup>。

55) 梅崎修「英国におけるオーラルヒストリー（2）—収集・整理・公開の方法—」（『法政大学キャリアデザイン学会紀要』Vol.12-2、2015年、121頁）。オーラルヒストリーのアーカイブズ化により調査記録は調査者の人生という短いスパンを超えられるとしている。

56) 安藤正人「アーカイブズ学の地平」（国文学研究資料館編『アーカイブズの科学』上、柏書房、2003年、181頁）に、「アーカイブズ活動におけるオーラルヒストリーについて、次の指摘がある。「アーカイブズ活動の一環としてのオーラルヒストリーは、公開利用が最終目的となるため、歴史学研究的聞き取り調査や民俗学研究の手法としての聞き取り調査とは、考え方も方法も異なるはずである」。

57) タイトルが「インタビュー記録」とされているので「インタビュー」の単語からは検索にかかるが「オーラルヒストリー」では検索にかからない。関連キーワードの入力も必要。

研究者に資料の存在を知ってもらい、批判を含めて利用されることがオーラルヒストリーの発展に寄与することが指摘されているが<sup>58)</sup>、広く利用されているオンライン目録やデータベースへの登録も利用への一助となる。「オーラルヒストリーを実施している事実」や「収集した資料が提供できること」を第三者に知ってもらうことが公開・利用への第一歩となると考える。

ウェブサイトを使った公開の例として、分野は異なるが、日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ<sup>59)</sup>の取り組みが挙げられる。美術分野に携わってきた人々の口述記録を収集し、文字起こししたものをウェブサイトで公開し、閲覧・利用を可能にしている。

このように、収集した口述記録が文章化されている、あるいは記録冊子として刊行されている場合、ウェブサイトや図書館への登録を通じて収集したオーラルヒストリーの存在を第三者に伝える方法があるが、あえて文字起こしをせずに音声記録を公開するといった方針を採っている所もある。沖縄県公文書館が公開している沖縄戦体験証言記録がその例である<sup>60)</sup>。テープに収録された音声記録がデジタル化され、語り手の許諾を得たものから公開されている<sup>61)</sup>。目録検索もウェブサイトで可能になっている。

オーラルヒストリーの情報提供・公開については、それぞれの組織特有の要件もあるので、語り手の許諾が得られた後、それぞれの組織の状況に合わせて検討をしていく必要がある。

はじめに述べたように、米国の大学や研究機関などではオーラルヒストリーの記録について重視され、論文等への引用も多くされているが、我が国においては、オーラルヒストリー自体への理解がまだ十分とは言えない状況がある。語り手の主観により率直に語られた記録が、時として周囲の誤解を招くこともあり得る。オーラルヒストリーが資料として広く活用されるためには、オーラルヒストリーの性格や特徴について周囲の理解を得ることも大切であり、アーカイブズ活動の一環として、そうした点も考えていかなければならない。

## ② 利用に関する環境の整備

オーラルヒストリー資料の存在を知らせれば、利用に関する問い合わせが来ることになる。その前に、利用についての要件を整えておかなければならない。詳細な利用規定の整備は、実際に利用の問い合わせがあった時、そのアーカイブズに所属する誰もが平等かつ速やかに対応するために必要なものである。

オーラルヒストリーは性格上、無条件で公開することが難しいケースが多いと思われる。公開・利用にあたって、語り手それぞれの許諾（公開してもよい、あるいはしたいという意思）

58) 梅崎・田口前掲書（註49）、321頁に指摘がある。

59) 美術史の研究者や学芸員により設立された非営利団体。2009年より現在に到るまで継続して日本の美術分野でのオーラルヒストリーを実施。ウェブページより印刷も可能になっている。〈参考〉日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ（URL:www.oralarthistory.org）。

60) 1967年に沖縄県史第9巻の編纂に伴い、県史編集委員を務めていた宮城聰氏の遺族から寄贈された資料。音声記録の大半は非公開資料となっているが、証言者本人や遺族関係者に公開の意義を伝え、承諾を得たものから順次公開していく方針が採られている。〈参考〉沖縄県公文書館（URL:www.archives.pref.okinawa.jp/publication/2009/06/post-211.html）。

61) 小林多寿子「オーラルヒストリーとアーカイブズ化の問題—社会学からの議論」（国際シンポジウム報告書『オーラルヒストリーと「語り」のアーカイブズ化に向けて—文化人類学・社会学・歴史学との対話』成城大学民俗学研究所グローバル研究センター、2011年）の中で、オーラルヒストリーを尊重したデータの保存公開の例として紹介されている。

を前提に、収集したオーラルヒストリーのテーマ・性格・目的、収集者の属する組織の規定・制約、予想される資料の利用者、利用のされ方などを考慮し、規定を整えていく必要がある。同時に、利用を考える者に対して、規定内容を分かりやすく示しておかなければならない。

先述した日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴのウェブサイトでは、利用条件や利用方法（営利・非営利目的別に記載）、引用にあたっての記載例が詳しく掲載されている。問い合わせや利用申請をする場合、メールフォームが用意されており、連絡が比較的容易に行える環境を整えている。利用に関する要件や問い合わせ先が明確に示され、利用者の視点から見て分かりやすいことも、利用を促進させる方法だと考える。

現在、当室で行われるオーラルヒストリーについて、語り手の同意を得た上で研究者を中心に冊子が公開されているが、論文や著作物などへの引用や利用について、条件や方法にやや曖昧な点がある。当室で独自に発行された冊子、あるいはホームページ上に、利用や引用に関する要件や連絡先等の記載がされていないので、論文等に引用したいと考える利用者がいても、引用しにくい現状がある。オーラルヒストリーの利用に関する規定、刊行物の様式、ホームページの整備も今後の課題である。

### ③ オーラルヒストリーの実施記録の作成（手法の蓄積）

オーラルヒストリーをどのような形で行うかは、ケース・バイ・ケースであるが、過去の実施経験から学んでいくことは多くあるのではないだろうか。実施したオーラルヒストリーについて検証し、記録を残すことも必要だと考える。実施したオーラルヒストリーから事例研究ができるよう記録を蓄積していくのである。実施記録もまた、オーラルヒストリーによって生み出される資料であり、次に繋げていく上で大切なデータとなり得る。

特に、実施したオーラルヒストリーに対し、第三者から異論が出た時の対応について記録を取ることは重要である。当室の例で言えば、過去に実施したインタビューについて、記録冊子が出た後に、異なる見解から意見がつけられ、追及されたことがある。語り手が述べた見解とは違う意見を同じプロジェクトに関わった研究者が述べ、記録に対する訂正と謝罪が求められた。その時の意見は、当室で記録としてファイリングされ残されている。それをもとに数年かけて対応がとられた。異なる見解を述べた方にインタビューを行い、違う視点からプロジェクトを語ってもらい、最終的に先に行われたオーラルヒストリーの記録と同じところへ配布することで納得していただいた。対応には時間を要したが、結果として1つのプロジェクトを多角的な視点から展望することに繋がり、同時に、公開の在り方を考えるきっかけともなった。

異論が出された出来事が記録として残され、その後、対応がとられたことは注目すべきことだと考える。ある意味、資料を保存し、今後の研究・業務に活かすというアーカイブズとしての機能が果たされたことにもなる。

こうした出来事への対応について記録化していくことは、継続してオーラルヒストリーを展開していく上で必要なことだと考える。経験を知識として記録し、多くの事例を蓄積させ、それを読んだ者が次にオーラルヒストリーを行う時に活かせるようにしていくことも、組織で継続してオーラルヒストリーに取り組む場合には必要ではないだろうか。

オーラルヒストリーとしてインタビューを行うことは、非常にデリケートな側面をもっている。公式な記録として残っていない内容が分かるのがオーラルヒストリーの醍醐味でもあるが、

関係者しか知らない事実の他に、場合によっては語り手自身が触れたくない過去に触れる場合があり、インタビューの進め方には注意を要する。記録を収集する聞き手の側には、専門的知識はもちろんのこと、語り手が話しやすくできるような話術、相手の心理を感じ取って話を進めたり、話題を転換させたりする鋭敏さなど、複合的で高度なスキルが必要になる。

米国ではオーラルヒストリーの技術を向上させるプログラムをもつ機関があるが、国内での教育環境の整備は発展途中である。こうした実情を考えた時、各機関でのオーラルヒストリーの実施記録が、今後、オーラルヒストリー技術の向上を図る際の参考資料となる可能性がある。

どのようなオーラルヒストリーを行う時に、どのような様子だったのか、何に注意を払ったのか。そうしたオーラルヒストリーの実施記録を蓄積し、事例として残していくことは、その記録を読む者のオーラルヒストリー・スキルを向上させるための一助となる。

記録に残せば直ちに全てのインタビューがスムーズにいくというものではない。しかし記録に残したり、検証を行ったりすることは、次のインタビューを実施する上で、有効な方法を考えるための手立てとなり得る。

科学分野でのオーラルヒストリーが決して多くはない我が国の状況下において、蓄積されるオーラルヒストリーの実施記録もまた、今後役立つ貴重な研究資料になると考える。

#### ④ 収集した資料の保存・管理

オーラルヒストリーを収集すると、それに付随した資料が収集されるのは第3節11項で記したとおりである。現在、公開対象にはなっていないが、将来の公開の可能性を考えた時、収集した資料を利用できる形で保存していかなければならない。

本稿を執筆するにあたり、当室で所蔵するオーラルヒストリー資料の調査を行ったが、その中で、保存資料の記録媒体に関する問題や、関連資料の収集量に差があることに気がついた。

記録媒体の問題について述べると、オーラルヒストリー開始期の記録は、ビデオテープ、カセットテープ、MDなどの媒体で録音・録画がされていた。連絡文書の中には、ファクシミリやワープロ打ちの文書で感熱紙を用いているものがあり、文字が薄れてきている資料もあった。

将来、これらの資料を活かそうと考えるなら、今から計画的に別の媒体への代替化を行う必要がある。過去の資料が再現できるのか、定期的な点検・確認が必要である。特に世の中の動きの中で記録媒体、あるいは再生機器に関する何らかの変化があった時には、所蔵する資料の再現（利用）に影響がないか考え、代替化への検討を速やかに進めなければならない<sup>62)</sup>。

CD-Rで保存されているデータについても絶対的に安全ではない。表記内容と中身が違う（別の人物のデータが入っている）という人為的なミスや、保存したファイルが開けないといったことがあった。保存する際には確認が必要である。

関連資料の収集量の差について述べると、最近の収集よりも初期の方が多くの資料が残されていることが分かった。これは校正作業の方法の変化に伴うところが大きい。

現在、電子メールを使い、複数人で校正作業を行っている。作業としては効率的だが、校正に関するコメントがメール返信で次々と繋がっていくため、校正の記録を資料として残しにく

62) 例えば国内唯一のVHSビデオのデッキ・メーカーであった船井電機が2016年7月末で生産を終了している。この方式で記録された資料について早い時期に代替化の検討を行う必要がある。

い状況にある。ワープロ、ファクシミリ、書簡時代の方が1つ1つ見やすい形で残る分、即座にファイリングすることが可能であり、保存しやすかったのではないかと考える。電子メールが日常の手段になることで、遠方の相手とも時間を置かずに校正の確認ができるようになったが、それゆえに「保存される記録」としての管理が曖昧になったとも考えられる。メール記録の保存については、今後の課題である。

また、初回が良くて、その後の資料収集にムラが出ているということは、オーラルヒストリーの実施によって生みだされる資料を登録するまでの流れが明確に定まっていないということでもある。これらの問題は、資料の保存や扱いに関するルールに曖昧な部分があること、共同研究で行っている関係で複数人が関わるゆえに、「誰が、どの段階で、何の資料をアーカイブズとして保存する」か、明確でないことも一因である。オーラルヒストリーに関する資料が生み出される各段階ではなく、記録冊子が刊行された後に、思いつきのような形でまとめて資料保存を行っていることも原因としてあげられるかと思う。

筆者自身が直接同席したオーラルヒストリーはまだ1件のみであるが、オーラルヒストリーの実施が共同研究者の手によって行われ、実際に資料登録・保存を行う者が、気がついた時に与えられるような形で資料の保存に関わるといった受け身的立場になっていることも問題だと考える。関連資料について、今後、アーカイブズとして資料保存が速やかに行える流れ作り、アーキビストの関与の仕方についても考えていかなければならない。

## 5. オーラルヒストリーにおけるアーキビストの役割

収集したオーラルヒストリーおよび関連資料をアーカイブズとして活かしていくためには、第4節の考察で述べたように、オーラルヒストリー実施に関する情報の提供、利用に関する環境の整備、オーラルヒストリー実施記録の作成（手法の蓄積）、収集した資料の保存・管理の流れ作りといったことが要件として挙げられる。

これらの要件を整えていくために、オーラルヒストリーとしてインタビューを実施する者とは別に、専門的に記録管理に携わる者を置く必要がある。インタビュー・テーマや語り手の決定時から、インタビュー実施に関する流れを記録し、インタビューの各段階で計画的に資料の収集・管理、目録作成を担う役割である。記録管理者として全体の流れを記録し、適切な資料保存を行う役割、公文書管理でいうレコード・マネージャー的存在が、オーラルヒストリー実施時にも必要であり、その任を担うのが、こうした研究組織におけるアーキビストの役割ではないかと考える。

当室のオーラルヒストリー収集活動の中では、記録資料が生み出される過程と、オーラルヒストリー実施によって生み出された資料を保存管理・利用に供する2つの過程がある。前者は核融合関係・科学史等の研究者の関与が中心であり、後者がアーキビストの関与となるが、この流れをうまくリンクさせることが速やかな資料保存を行うことに繋がると考える。

何の資料が生み出されているかは、今回の調査の中でおよそ見えてきたので、インタビューを実施する核融合分野やオーラルヒストリーの研究者と連携し、どの段階で保存していくかを考え、資料収集・保存対策に積極的に関わっていくこと、あるいは実施に関する記録を残し、公開・利用の規程の整備を考えていくことが、アーキビストとしての役割を果たしていく上で、

自身の今後の実践課題である。

それと共に、核融合研究の関係者の系統の把握・データの蓄積をすることも必要だと考える。核融合研究は世代や機関をまたがる研究であることから、オーラルヒストリーの中で師弟関係、親族関係、同期・同門の関係、所属機関での同僚関係の話などが出ることがあった。こうした関係性の把握も今後の資料収集の手がかりとなり、欠損している資料の補完に繋がる可能性がある<sup>63)</sup>。系統に関する資料の収集・データの蓄積も、アーキビストの役割であると考えられる。

## おわりに

今回のオーラルヒストリーの論文執筆に係わる調査にあたり、当室の協力員になっている方々に協力を仰ぎ、直接質問をしながら話を伺った。話を聞く中で、一見整然と見えるオーラルヒストリーの記録であるが、1つ1つのインタビューが試行錯誤の連続であり、その中でオーラルヒストリーの手法が考えられてきたことが分かった。

当室のメンバーは、アーカイブズやオーラルヒストリーの専任ではなく、自身の本来の専門的研究や業務を抱えながら、共同研究としてインタビューを実施し、記録を作成してきた。協力員の方々には、退職後もオーラルヒストリー収集に係わり続けていただいている。「実際、オーラルヒストリーを行うのは大変だ」という話も聞いたが、異なる意見の調整など、決して順調にきた歩みではないので、その言葉について頷けるところがある。

「それではなぜ、そんな大変な思いをしてまでオーラルヒストリーを行うのか。やめることは考えなかったのか」という質問を思いきってしてみたところ、「大変だが、記録として残しておくことは、この先、ますます必要になる」という答えが返ってきた<sup>64)</sup>。こうした核融合研究開始の当時を知る研究者の熱意によって、オーラルヒストリーが成り立っているともいえる。

日本で核融合研究が始まって既に50年以上になるが、研究はまだ基礎的な段階である。長期に亘る研究の中で既に研究者の世代交代が行われ、黎明期に活躍し、研究を牽引してきた科学者たちは高齢域に達している。語り手のインタビュー時の平均年齢を計算したところ、約79歳。「この方に」と思っても実現できなかったケースもある。こうした状況から考えても、「研究者の記憶」を「記録」として残す作業は急務だと言える。

科学分野の発展は、国家的な戦略とも絡んでおり、その規模が大きくなるにつれ、巨額の費用が投じられるようになってきた。核融合研究はいくつもの実験プロジェクトを経ながら進んでいくため、科学分野においても特に長い年月がかかる研究である。黎明期の科学者達からさらに3、4世代後になって実現の可能性がどうかと言われている。

研究段階が進むにつれて規模が大きくなり、多額の費用がかかるため、必然的に組織の改編や統合も行われる。こうした変遷を知る研究者の生の声を通し、研究や組織活動の記録を留め

63) 系統の把握は、科学系に限らず、音楽・美術・芸能分野など、何らかの師弟関係、あるいは一門などが形成され、流れが受け継がれている分野の資料収集・研究を行う際には必要なことだと考える。弟子にあたる研究者が、恩師である研究者の資料を預かっているケースもある。

64) 「森茂氏インタビュー記録」(核融合アーカイブ室 [ID: 100-10-01]、2012年、4頁)で、森も米国と比べて日本におけるオーラルヒストリー活動が欠落していることにふれ、「研究者の古い話を残しておくことは大切。アーカイブズ活動の必要な理由の1つ」としている。



ておくことは、研究が何かの形で停滞をした時、あるいは若い科学者が核融合研究について考える時に参考となり得るものである。先達の言葉から次への指針を見出し、また次に組織編制を考える必要が生じた際に、過去の研究体制構築に関する資料は活かせるものである。

将来のエネルギー資源の枯渇が心配される中、核融合研究はその問題についての解決の可能性を秘めた分野として期待されている。今後を活かす記録資料とするため、核融合研究関係者のオーラルヒストリーの収集や、核融合研究関連資料の収集は、当室の大切な役割だと考える。

## 謝 辞

本稿は2015年度アーカイブズ・カレッジ（長期コース）修了論文「核融合アーカイブ室におけるオーラルヒストリーの収集手法」を改稿したものであり、核融合科学研究所・核融合アーカイブ室の共同研究に基づいている。論文執筆にあたり、テーマ決定から作成に至る過程において国文学研究資料館研究部の太田尚宏氏に御指導・御助言をいただいた。オーラルヒストリーに関する調査・研究にあたり、核融合アーカイブ室の久保伸室長、難波忠清氏、木村一枝氏、松岡啓介氏、井口春和氏、日本大学理工学部・雨宮高久氏からお話を伺い、御助言および資料提供など御協力をいただいた。アーカイブズ・カレッジ修了論文報告会の際にいただいた御質問や御意見が、今回の執筆の際、参考となった。この場を借りて、お世話になった皆様方に心より御礼申し上げたい。